賊星《ナガレボシ》

吾妻栄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
賊星（ナガレボシ）

【Ｎコード】
Ｎ００２８Ｚ

【作者名】
吾妻栄子

【あらすじ】
タイトルは中国語の俗語で「流れ星」の意味です。
華やかだった１９３０年代の上海を舞台に、
行商をする貧しい母子の悲劇を描きます。
＊他サイトでも発表した作品です。

柄杓星《ひしゃくぼし》

「母ちゃん、見て！」

少年は大きな目をパッと輝かせると、煤けた小さな手で北の空を指差した。

「流れ星だよ！」

白い八重歯を覗かせた、浅黒い顔いっぱいに笑いが広がる。
今年七つになるこの子の本名は「宏生（ホンション）」だが、
浅黒い顔といい、吊り上がった大きな目といい、八重歯といい、
子ガラスそっくりな風貌をしているため、知る人からは専ら「鴉児（ヤール）」
と呼ばれている。

「どこ？」

母親は安パーマの緩んだ、しかし豊かで艶のある黒髪を揺らすと、
幼い息子の示す方角を窺った。

「ああ、もう消えちゃった。」

鴉児は舌打ちする。

「どうして、すぐ消えちゃうのかな？」

母親は腕に提げた花籠を持ち直すと、白玉（はくぎょく）じみた蒼白い顔に
ふっと微笑を浮かべた。

「宏生（ホンション）、それは、お星様だからよ。」

母親だけは、少年を本当の名で呼ぶ。

柄杓星《ひしゃくぼし》

「消えないお星様だっていっぱいあるよ」

鴉児は小さな口を尖らせた。

「あの柄杓星(ひしゃくぼし)はいつだって北の空に見えるし」

言いながら、鴉児は諦めきれずに北斗七星に目を凝らす。
さっき見た星は、あの柄杓(ひしゃく)の、ちょうど柄の真ん中を切るようにして流れたのだ。

「すぐ消えるから、流れ星なのよ」

諦めなさい、という風に母親はひっそりした声で告げると、少年の手を引いた。
母親の手から伝わる温みに、鴉児は自分の指先が冷え切っていたことに気付く。

「今日は寒いから、早くご飯買って帰りましょうね」
「うん」

鴉児は母親の手を握り返して、こくりと頷いた。

本当は、今日「は」じゃなくて、今日「も」寒いんだ。
多分、明日(あした)も、明後日(あさって)も…。

「早くあったかくなるといいね。」

口に出すと、余計に暖かい日が遠くなる気がして少年は微かに身を震わせる。

「すぐに、春になるわ。」

信じなさい、と言い聞かせる声で母親は答えると、小さな手を握る力を強めた。

早く春が来るよう流れ星にお願いしたい気持ちで、鴉児はまた北斗七星を見上げる。

それは、まるで北の空に浮かぶ、氷で出来た巨大な柄杓の様に映った。

もしかすると、夜にいつも見える星は凍っていて、
流れ星はあったかいお湯で出来ているから、
すぐ空の上を流れていって見えなくなってしまうのかもしれない。

夜市《よいち》

「粽子(ちまき)を六個」

屋台の喧騒の中から、すぐ前に立つ母親の声が鴉児の耳を捉える。

やっぱり、今日も六個だ。

鴉児は肩を落として、手に持った花籠を見やる。

萎(しな)びて本来の緋色から黒っぽく変色した薔薇が、籠の半分以上を埋めている。

まだ生乾きの薔薇の、むせ返る様な芳香が

少年の鼻先よりやや上にぶら下げられた母親の花籠からも漂ってくる。

母ちゃんの籠にも花がいっぱい売れ残ってるんだ。

どれだけ余っているのか、鴉児は背伸びして覗く気にもなれなかった。

籠の八割以上花が売れた日は十個、六割ぐらい捌(は)けた日は八個、

そうでない日は六個だけ母ちゃんはいつも夕飯に粽子を買う。

いつも花を売りに行く公園の木が葉を落とし、散歩する人が少なくなってからといもの、

ずっと晩飯は六個の日が続いている。

「行くわよ」

人混みの中、母親に手を引かれながら、鴉児は腹を擦って空を見上げた。

今度、流れ星を見たら、毎晩粽子が十個買える様にお願いしよう。

夜市《よいち》

「はい、焼餅（シャオピン）、焼餅、焼き立てアツアツの焼餅はいかが？」

売り子の声と共に、温かで香ばしい匂いが鼻孔を衝く。

やっぱり、焼餅もお願いしよう。

鴉児は思い直す。

母ちゃんは、粽（ちまき）子の方が腹持ちするからと言うけれど、
おれはこんがり焼けた餅の方が、本当はずっと好きなんだ。

「蜜たっぷりの山査子（サンザシ）だよー！」

流れてきた甘酸っぱい香りに、今度は涎が出る。

山査子もいいな。

九月の重陽節（ちょうようせつ）の頃、母ちゃんとお祭りの屋台で一本買って、
半分こして食べたきりだ。

食べて噛みしめたあの味は、匂いよりもずっと甘くて、そのくせ酸っぱくて…。

あの時、夢中で串にむしゃぶりついたせいで、最後の一個はドブに落としちゃった。

母ちゃんがやめろと泣きそうな顔で言うから、拾わなかったけど…。

「親父、海鮮炒麺（ハイシェンジャオミエン）を二つ！」

飛び込んできた威勢の良い頼み声に胸が騒ぐ。

炒麺って、食べたことないや。

いっつも、この市場に来るたびに、よその人がチュルチュルおいしそうに
麺を啜るところを遠くから見るだけ…。

夜市《よいち》

「気取った餐庁(レストラン)なんかより、ここの屋台の方がずっとうまいよな」

喧騒からまた誰かの声が届く。

せっかく、流れ星にお願いするなら、普段食べられないご馳走の方がいいかも。

鴉児はまた思い直す。

上海蟹、北京ダック、鱶鰭(フカヒレ)のスープに燕の巣…

次々ご馳走の名は浮かんでくるが、どれも名前を耳にしただけで、どんな食べ物なのかは見当もつかない。

「今日は三回くらい洋車(ヤンチャ)にぶつけられそうになってヒヤヒヤしたぜ」

「あんなもんに轢かれたらペシャンコだ」

「洋人(ようじん)の奴らは気違いみたいに飛ばすからな」

屋台の客たちの声がまた鴉児の耳を通り過ぎる。

どうせなら、中国だけじゃなくて、洋人のご馳走も食べてみたいかな。

しかし、そうなると今度は名前が浮かんでこなかった。

強いて思い浮かぶとすれば、

いつも大通りで花を売り歩く時に洋菓子屋の前を通ると流れてくる

ふんわりした甘い匂い。
それから、真夏に公園を散歩していた洋人たちがよくおいしそうに舐めていた、不思議な溶けるお菓子。
珈琲(コーヒー)って凄く苦いらしいけど、お茶とどう違うのかな？

頭の中で次々食べ物を追加しながら、
鴉児は色とりどりの灯りが点る市場の路上から夜空を見上げて目を皿にした。

汚泥

パチャン！

「あ！」

爪先のヒヤリとした感覚にしまったと思う。

「このガキ！」

水溜まりに突っ込んだ右足のヒヤリがヌルヌルに変わる前に、怒鳴り声が前から飛んできた。

「すみません。子供がボンヤリしていて…」

鴉児が口を開くより先に、母親がズボンの裾を泥で汚した相手にせかせかと頭を下げる。

「このチビ、どこに目を付けて歩いてやがる！」

相手は母親の言葉を遮ると、鴉児に怒鳴り声を浴びせかけた。

「おじさん、ごめんなさい」

鴉児も小さな頭を深々と下げる。

空ばかり見ていて、全然足許に気が回らなかった。

「おじさん、だと？」

甲高い怒鳴り声からくぐもった唸り声に転じた相手を、鴉児は改めて見上げる。

全く男前でもなければ品のかけらもないが、
年だけは若いと分かる男が、誇りを傷付けられた顔つきでこちらを見下ろしていた。

「あ、おにいさん、ごめんなさい」

もっとまずいことになってきた。

水溜りから取り出せない右足がどんどん泥水に浸食され、
凍りつく様な感覚が鴉児の爪先から背中を這い上っていく。

汚泥

「このチビ、目ン玉をくりぬいてやる！」

爪の先尖った、大きな手が上から伸びてきたかと思うと、
母親の蒼白い手の甲が少年の眼前に立ちはだかる。

「お願いです、子供のことですから…」

「うるせえ、邪魔なんだよ」

若い男が母親の手首を掴んだところで、不意に、その後ろから
上等な外套を着た中年の小太りの男が出てきた。

「もう、よさないか」

どうやら若い男は一人歩きではなく、
周囲にゾロゾロいる険しい目つきの男たちと連れ立って行動してい
たらしい。
無言で自分と母親を見下ろしている幾つもの顔から、鴉児は今更の
様に気付いた。

「こんな所で、女子供相手にみっともないぞ」

年恰好や服装からして男たちの頭目らしい、外套の中年男が若い男
をたしなめる。

助かった。

鴉児が息を吐いて母親を窺うと、平素も白い母親の顔は更に血の気

を失って
紙の様になっており、繋いだ手を痛いほど強く握られた。

汚泥

「何だ、阿茉(アモー)じゃないか」

外套の中年男が急に目を丸くする。

そのギョロリとした目が、母親の豊かな黒髪、化粧気のない蒼白い顔、
洗い晒して色も生地もすっかり薄くなった服に包まれた胸、
ほっそりした足に履いた破れ靴をなぞって、隣の鴉児まで捕えた。

「こんな所で遭うとはな」

中年男の赤黒い顔ににんまりとした笑いが広がった。

「やっぱり上海は狭いぜ」
「雲哥(ユンあにき)のお知り合いですか？」

ズボンを汚した若い男が打って変わって笑顔になり、母親から離した手をさっと後ろに回す。

このおにいちゃん、急に声まで変わったぞ。

こういう変わり身を目の当たりにするのは初めてではなかったが、鴉児はやはり嫌な気がした。

「古い顔馴染みさ」
「そうなんすかあ」
「えらい別嬪(べっぴん)さんですね」

「当たり前だろ」

男たちの会話をよそに、母親は俯いたまま何も言わない。

汚泥

「花を売ってるのかい？」

外套の男は、母子が提げた籠と俯いている母親の胸元を交互に推し量る様に眺めながら尋ねた。

「そうだよ」

母親に代わって鴉児は答える。

こいつもやっぱり、嫌なやつだ。

母ちゃんをジロジロ眺めて、何だか面白がる顔つきをしている。

普段、花を売る客の中にも、母親を眺め回す男は少なくない。

しかし、この外套の男の視線には、

そうした通りすがりの人間よりもっと露骨で執拗な何かが感じられた。

「この寒いのにかい？」

外套の男は今度は母親の細く長い脚から

不恰好な古い靴の爪先にまで目を注ぐと、口の端で笑う。

そうすると、口ひげの下から、黄色い乱杭歯がのぞいた。

「寒い時に花を売っちゃ悪いのかい」

鴉児が何とか男と目を合わせようと顎を突き出すと、

母親と繋いだ手が更に強く握り締められる。

やめなさい、と暗黙に言っている様だ。

「あいつそっくりだな」

外套の男は二重になった顎で鴉児を指すと、いかにも可笑しそうに笑った。

ズボンを汚した男や他の仲間らしい連中もニヤついている。

「親父も雪の日に夏物一枚と水一杯で晩まで働く奴だったしな」

汚泥

「阿雲（アユン）」

母親が俯いたまま低い声で呟く。

「まだ私たちをバカにしたいの」

「そんなんじゃないさ、阿茉（アモー）」

外套の男は、今度は妙に粘り気のある声で母親の名を呼んだ。

「お前は誤解してるみたいだが、俺と阿耀（アヤオ）は同郷の仲間だったんだぜ」

こいつ、父ちゃんと知り合いだっていうのか。

男がしたり顔で父親の名を口にするのを目にして、鴉児は、唾を吐きたくなるのを堪えた。

まるで、匪賊（ひぞく）の頭（かしら）みたいなやつじゃないか。

「一緒に郷里（くに）から出て、最初は同じ店で丁稚（でっち）したしな。振り出しは二人とも同じだった」

周囲の子分たちにも聴かせる様に言うと、男は今度は鴉児に顔を向けた。

「お父さんの棺桶代だって、おじさんが出してあげたんだよ」

撫で擦る様な口調とは裏腹に、ゾッとするほど冷たい目がこちらを見下ろしていた。

「その時はお母さんのお腹の中にいたから、君は知らないだろうけどね」

母親が無言で歩き出したので、手を繋いだ鴉児も引っ張られる形で歩き出す。

外套の男も手下らしい連中も、思いの外あっさり道を空けた。

「いつでも相談に来いよ、別嬪さん！」

鴉児が振り返ると、外套の男はまた最初の面白がる顔つきになっていた。

「あの界隈はもう引き払ったけど、俺に逢いたきゃ、夜は大体、『大世界（ダスカ）』の賭場にいるぜ」

鴉児と目を合わせて憎々しげな笑いを浮かべると、男は再び顎をしゃくる動作をした。

「花売りだけじゃ、坊やの靴も揃わないだろうからな！」

この次、流れ星を見つけたら

「母ちゃん」

裏通りに出ると急に辺りは静かで真っ暗になった。

「泣いてるの？」

「ううん」

黒い影になった母親は鼻に手を当てて首を横に振る。

「何でもないの」

鼻を啜り上げる音が辺りに響いた。

やっぱり、母ちゃん、泣いてるんだ。

鴉児は濡れた右足が次第にかじかむのを覚えながら、左足で道端の石を蹴った。

蹴った小石は、カツカツと乾いた音を立てながら路地の遠く、どこか確かめられない場所に幽かな音を立ててぶつかった。

悪い奴らが、母ちゃんを泣かせた。

鴉児は歯を食いしばって夜空を探る。

この次、流れ星を見たら、早く大きくなって悪い奴らを倒せる様にお願いしよう。

おれはもう七つなのに、いつも三つか四つと間違えられる。
だから、お星様にお願いして、大人の洋人くらいの体にしてもらうんだ。

見上げる空は雲が立ち込めてきたらしく、星一つ見出せなかった。

「今夜は雪になりそうね」

母親がぽつりと独り言の様に言った。

この次、流れ星を見つけたら

「それじゃ、母ちゃんは出掛けてくるからね」

どこに仕舞っていたのか、母親はいつも夜着る黄緑の旗袍（チャイナドレス）より
もっと派手な緋色の旗袍に、普段より更に濃い赤の口紅を引いていた。

「うん」

毛羽立ってあちこち擦り切れた毛布にくるまったまま、鴉児は壁を
向いたまま答える。

誰にも言ったことないけど、絶対誰にも言えないけど、
おれは、化粧した夜の母ちゃんの顔は嫌いだ…。

母ちゃんじゃなくて、どこかよその女の人みたいで怖い。

「宏生（ホンション）、朝までいい子で寝てるのよ」

「うん」

染みの広がった壁に向かって頷く。

バタンと扉の閉まる音がしてから、初めて鴉児は母親の去った方を
向く。

毎晩、あの扉の閉まる音を聞くたびに、
母ちゃんがこれっきり二度と帰ってこない気がして怖くなる。

灯りを消した部屋の中で眺めると、白い壁に点々と生じた染みは、浮かび上がった幾つもの人の顔の様で、黒い扉はまるで見る者を吸い込む四角い穴の様に見える。

鴉児は思わず身震いすると、冷気の流れ込んでくる毛布の穴を握り締め、
寝転がったまま膝を抱えて目を閉じた。

この次流れ星を見つけたら、母ちゃんが毎晩化粧して外に出ていかないようにも、
絶対お願いしなくてはいけない。

晨星

「母ちゃん！」

東の空にようやく光がさした頃、大通りは一面に白い雪に覆い尽くされていた。

「どこ行ったんだよう！」

薄暗く人影一つ見当たらない通りに、幼い声が響く。

「お花売りに行く時間だよう！」

本当は、いつもなら、化粧を落とした母親がお湯を沸かして、買ってきた朝食の粽子の包みをテーブルで開いているぐらいの時刻だと鴉児は知っている。

だが、そんなことはどうでも良かった。

「早くしないと間に合わないよう！」

まだ爪先が湿ったままのボロ靴で雪の上を急いて駆け出すと、鴉児は凍り付いた路面につるりと転んだ。

「もう朝なんだから…」

それに、おれは朝までいい子で寝てたんだから。

柔らかな雪は、まるで綿の様に転んだ痛みを和らげたが、

握り締めた拳の中で、瞬く間に冷たい水に溶けて零れ落ちる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0028z/

賊星《ナガレボシ》

2011年11月30日13時53分発行